

大江億司写「動脈一覽図」とその背景について

ミヒエル, ヴォルフガング
九州大学：名誉教授

<https://hdl.handle.net/2324/26184>

出版情報：史料と人物. 5, pp.62-85, 2013-03-27. 中津市教育委員会
バージョン：
権利関係：



中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書 XII

史料と人物

V

ミヒエル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀共編

中津市教育委員会、平成二五年三月

大江億司写「動脈一覽図」と その背景について

ミヒエル・ヴォルフガング

はじめに

明治二（一八六九）年十月に、政府がドイツ医学を導入することを決定してまもなく、日本の医学教育は大きく変わり始めた。中津鷹匠町大江医家の七代・億司は、同家の家督として初めてこの新しい制度のもとで医学教育を受けた。当時、急遽設立された地方の医学校の大半は、短命に終わったが、現存の資料が少なく、教育内容や教材に関する研究は十分になされたとは言いがたい。本稿では、大分県公立医学校に入学した億司の遺品から「動脈一覽図」という掛図を取り上げ、その背景に迫りたい。

一、大江億司の生涯の概略

大江億司は、幕末の元治元（一八六四）年一月五日に中津藩医大江雲澤（一八二二～一八九九）の三男として生まれた。母イツ（逸）は雲澤と同様に中津藩の藩医を務めていた村上玄秀の長女であった。幼少時の教育に関する情報は少ないが、山本艸堂が昭和八年に発表した『下毛郡史』によれば、

億司は新堀小学校で初等教育を受けたのち、十一才の時から「今津村橋本将多先生の塾に」二年間漢籍を学び、明治十（二八七七）年、中津市学校に転じた¹。同校は、福澤諭吉と小幡篤次郎が開いたもので、両名の共著『学問のすゝめ』（第一編）はその設立の精神を伝えている。

政府は明治七（一八七四）年に、医師の資格、試験制度、医学校、病院などに関する規定を定めた「医制」を發布し、その五年後には、医師資格試験の試験科目は完全に西洋医学のみとなった。明治四（一八七一）年設立の中津医学校は、長く続かなかつたので、億司は明治十三（一八八〇）年三月一日に大分市高砂町に開設された「大分県公立医学校」（以下、大分県立医学校）の第二回の生徒募集時に入学することになった²。

現存史料のうち、億司と大分県立医学校に関連のある最初のもものは、明治十四年四月一日付の学校幹事宛ての「保証書」である³。

図一 大分県公立医学校

保証書

湯谷峯司

岡本左馬太⁴

大江億司

鍋寫伊造

右之者本夜緊要事件
有之相招詰談中又圖

要数時間付者貴校

正規ヲ犯シ門限二遅、二候

此段保証候事如件

十四年四月一日

大分町

宇都宮徠〔印〕

大分縣公立醫學校

幹事御中⁵

門限に遅れた四人のために証を立てた宇都宮徠^{きたる}（一八九三
一八九四）は、医学校の設立に大いに関わった県下初の開業
医である⁶。

二階建ての学生寮（「生徒室」）については、初代校長・鳥
潟恒吉が明治十六年に発表した報告の平面図で確認できる
（図一）⁷。

明治十五（一八八二）年に文部省が医学校を甲・乙二種に
分け、甲種医学校には卒業者に無試験で医師免許を交付でき
る権限を与えた。乙種医学校として発足した大分県立医学校

は、三年課程の最終年に実施する卒業試験と「医術開業試験」
を併用させ、合格者に「内外科開業免状」を与えることとし
た。第一回生は明治十六（一八八三）年に卒業するはずだっ
たが、実際に卒業したのは、その一年後だった。発足したば
かりの教育機関における設備、教材、教育内容上の様々な不
備が、遅れの原因となった可能性がある。また、学校の規則
や合格者数を見ると、教育の責任者が、妥協することなく高
度な専門知識を持つ医師の養成及び甲種医学校への昇格を目
指したことも、その一因であろうと思われる。

文部省が設定した甲種医学校の条件は次の四点である。

- 一 三名以上ノ医学士ヲ教諭ニ宛テルコト。
- 二 生徒ノ員数ニ相当セル助教ヲ置クコト。
- 三 四年以上ノ学期ヲ定メ教則並ビニ試験法ノ完
備セルコト。

四 附属病院アリテ生徒ノ実施演習ヲ為スコト。⁸

大分県立医学校は鳥潟恒吉^{とりがたつねきち}（東大十二年卒⁹）、魚住以作^{うおすみいさく}（東
大十四年卒）、黒柳精一郎（東大十六年卒¹⁰）の三医学士教諭
に加え、五十川徹夫、大橋純、中村良一の三助教が教鞭を執り、
教員の質と数において条件を十分に満たした。医学校と共に、
実地演習のための附属病院も開設された。修業年限を四年に
延長し、動物学、植物学、衛生学、裁判医学などいくつかの教科
を導入すれば、昇格は達成できる状況だった。

立場から記したこの資料の内容は本稿の範囲を超えるので、また別の機会に取り上げることとする。

『下毛郡史』に「明治十六年春、規則改正と共に一度京都に出でしも、幾くもなく大分に帰れり」とある。億司は京都府立病院医学校に転校するため、西京木屋町に滞在していた。細田富多が発見した関連史料の中に、この時の億司宛ての書簡と電報がある¹³。同伴者の鍋島伊蔵は、上述の「保証書」にも名が記載されている同級生であり、差出人の山内鍊甫と筑波直は大分県立医学校の二回生である。

・四月 日 工藤傳十郎（大分医学校）↓大江億司
（西京木屋町二条下ル上樵木町十二番地 山内ユキ方）

・六月十二日 工藤傳十郎（大分県立医学校）↓
大江億司・鍋島伊三（西京木屋町二条下ル上樵
木町十二番地 山内ユキ方）

・六月十七日 山内鍊甫・筑波直（大分県立医
学校南舎）↓大江億司・鍋島伊蔵（西京上樵木
町十二番地 山内ユキ方）

・六月二十日、六月二十一日、六月二十四日
安東九華↓大江億司・鍋島伊蔵宛ての電報（西
京木屋町二条下ル上樵木町十二番地 山内ユキ
方）

上記の書簡には年が示されていないが、少なくとも四月から六月下旬まで京都にいた大江億司は、明治十六年六月付の進級証を大分県立医学校から付与されているので、京都への「脱出問題」は無事に片付いたようだ。その直後に始まった大分県立病院での実地演習に億司が参加したことが、翌年六月の証書からわかる。

明治十七（一八八四）年、大分県立医学校の甲種昇格が認可された。

「七月十二日 甲種医学校ニ改メラレ本校ニ於テ卒業ノ者ハ試験ヲ要セズ開業免許ヲ受容セラルベキ旨ヲ達セラル

同月十五日 甲種医学校開校の典ヲ挙ゲラレ併セテ第一回生徒医学卒業証書授与ノ式ヲ行 此卒業証書ヲ得タル廿五名ハ曩ニ成規ノ医術開業試験ヲ経悉ク及第開業免許ヲ授与セラレタリ」¹⁴

明治十八年の億司の修行に関する証書は残っていないが、彼は明治十九年に初等卒業試験に合格し、卒業証書を授与された。その試験科目は次の通りであった。

十九年一月（卒業試験第一科目） 内科総論及各
論 内科実験 産科 附産科模型
演習 婦人科

十九年二月（卒業試験第二科目） 外科総論

外科各論 外科実験 眼科 眼

科実験

十九年二月（卒業試験第三科目） 薬物学 衛

生学 裁判医学



図三 大江億司の肖像写真
（大江満氏蔵）。

その後、億司は「実地の経験を東京で一年間積んで中津に」戻り、父雲澤の医院でさらなる経験を積んだ。『下毛郡史』はその後の活動を以下のように総括している。

「二二（一八八八）年陸軍大分司令部徴兵検査医員を嘱託せられ、翌年小倉司令部附に転じ、二三

（一八九〇）年又之に任ず、此年の又二豊新聞社の創設によりて奔走其功を全うせりとぞ、二六（一八九三）年東京にて国家医学講習会あり君はあり県知事より選拔せられて之に出席し半歳の間に頗る其知見を広めぬ、三四（一九〇一）年には中津町医、中津町小学校医、豊田小楠両村医、同小学校医等を嘱託せられる、翌年には郡医師会幹事及会計、中津医会幹事、大日本衛生会中津支会副会頭等を選ばる」¹⁵（西暦年は筆者が追加）

若き医師億司は徴兵検査や学校の校医などを務め、多くの人々と接する機会に恵まれた。次第に地元の政治に興味を持つようになり、やがて政界に進出し、医療の傍ら町、郡、県の議会で活躍した。

「三二（一八九九）年中津町会議員に挙げられ以て今日「大正一年」に至り、三八（一九〇五）年郡会議補欠選挙に当選し、四十年再びそれ任に当り、推されて郡会副議長たり、四三（一九一〇）年横井議長退任と共に議長に当選す、四四（一九一）年九月県会議員改選に当り同志より推され大多数を以て当選の光栄を擔ひ現に県政に参与して奔走しつゝあり」¹⁶

公職で地元の発展に尽くした億司は、大正八（一九一九）年八月十日、五六才の若さでこの世を去った。墓は中津の本伝寺にある。法名は広施院釈慈照居士。

億司の人柄について、『下毛郡史』にはこう記されている。

「君資性温厚にして事に当たり深謀遠慮軽しく決せず、喜怒を色に顯はさずして頗る人心を収攬す」¹⁷

また、億司の髭は、印象的だった（図三）。

「淡黒の鬚髯々多きを加へ、威容堂々国士の風あり」¹⁸

衛藤庵は、一九三三年に刊行された『党人郷記』で億司の個性に言及している。

「変り種を拾ふと中津の大江億司がある。郡会議長から四十四年県会議員になったが、人物が無欲恬淡で奇行に富んでいた、め、奇人変人として有名だった「・・・」医術の方では親父ほどに名医の誉れはなかったけれど医を仁術として終生通した点では、雲澤と変わるところがなく、貧乏人は特別親切に診（み）てやり薬価の請求などしたことがなかったのみか、地元の連中は超党派的に彼の仁術をたゝへ、徳を慕っていた。

議場での彼は、粗末な五ツ文を片前下りに着て自慢の鬚髯を引つ張り、終始沈黙をまもったが、座談にかけては県会切つての妙手で、口をついて出る皮肉、諧謔には満座腹を抱へさせられたものだという。彼はまた非常な酒豪で酔へば浄瑠璃の押売りをやって夜を更けるも、とおかでもないという悪い病氣（？）があったので、余程薬代の溜まった連中でない最後までは神妙に聴けなかったそうだ。」¹⁹

億司の前妻フサ（一八七〇～一八九二）は二十二才で亡くなり、後妻ナオ（一八七〇～一九四四）は、億司より長生きした。長男萬三、次男範治、三男範道は幼いうちに死去し、億司の弟億五郎の三男忠綱が、養子として第八代家督となった。

二、大分県立医学校の教育について

初代校長鳥潟恒吉の『大分県病院兼医学校第一次報告』によれば、医学校設立の運動が始まったのは明治九（一八七六）年である¹⁹。その担い手は佐野僑達、藤野玄洋²¹、宇都宮徠（大分県庁登録の開業医第一号）、田吹玄珠、下瀬文蔵²²ら県下の医師たちだった。宇都宮徠と同じく長崎養生所でオランダ人陸軍軍医アントニウス・ボードイン（Antonius Franciscus Baudin）に師事した藤野玄洋は、明治四（一八七二）年、大江雲澤らと共に中津医学校兼附属病院の

[illegible]

図四 大分県立医学校の時間割
(鳥潟恒吉『大分県病院兼医学校第一次報告』、二七丁)。

開設を進め、その病院長を務めた。

個人的要素が多い師弟関係が基本の医学教育を総括するのは容易ではないが、江戸期の藩校、漢学塾、蘭学・洋学塾などでは、塾生の教育がすでに体系的に行われていた。幕末の長崎で近代医学教育を導入したポンペ・ファン・メルデルフォールト (Johannes Lydius Catharinus Pompe van Meerdervoort)、ボードイン、クーンラート・ハラタマ (Koenraad Wolter Gratama) らの教え子たちは、厳しい管理のもとでの生活や学業に慣れており、明治初期の医学校は、

この管理体制をより發展させたものといえる。大分県病院兼医学学校の報告は、教育の組織化がさらに進んで行く様子を伝えてゐる。同様な傾向は、病院の医療についても確認できる。各種規則が次第に細かく定められたのは、運営経験上の必要性からであろうが、患者や病気の分類も次第に細くなつていった²³。

修業年限三年として発足した学校のカリキュラムは六期に分けられていた。科目とその周時間数は次の通りである。

第一期 理学(六) 化学(六) 解剖学(六)

第二次報告（明治十六・十七年）では、養成期間は四年間になり、科目も週の時間数も大きく変わった。

第一期	動理学（六）	無機化学（六）
	解剖学（九）	生理学（三）
第二期	動理学（六）	有機化学（六）
	解剖学（九）	植物学（三）
第三期	生理学（十二）	組織学（六）
	内科総論（三）	薬物学（三）
第四期	外科総論（六）	内科総論（六）
	診断学（五）	薬物学（七）
第五期	外科総論（六）	外科各論（六）
	内科各論（六）	眼科学（六）
第六期	外科各論（六）	内科各論（六）
	眼科学（六）	婦人病論（六）
第七期	産科学（六）	外科臨床講義（九）
	内科臨床講義（九）	眼科臨床講義（六）
第八期	衛生学（六）	裁判医学（六）
	外科臨床講義（九）	内科臨床講義（九）
	眼科臨床講義（四） ²⁷	

専門書は病院にも学校にも置かれていたが、学生が主に利用したのは、学校のものと思われる。当初の報告は「理科書」、「生理書」、「外科書」、「図式書」などの項目とその部数しか

載せていないが、第三次報告の「医学校備属書籍表」には下記の分類で合計三四七部の書名が列記されている²⁸。

原書生理学ノ部	原書内科学ノ部
原書外科学ノ部	原書解剖学ノ部
原書産科学ノ部	原書婦人科学ノ部
原書組織学ノ部	原書薬物学ノ部
原書眼科学ノ部	原書衛生学ノ部
原書裁判医学ノ部	原書理学ノ部
原書化学ノ部	原書植物学ノ部
動物学ノ部	原書耳科書ノ部
英書ノ部	雑書ノ部
訳書並和漢書ノ部	

明治三（一八七〇）年以降、政府はドイツを手本に医学と医療の近代化を進めていたためドイツの医書が多い。大江医家史料館には、億司の医学校時代の教科書と講義ノート数点が保管されている。

▲「裁判医学 全」大分県立医学校二等教諭医学士黒柳精一郎先生講述、生徒大江範敏「億司」筆記。ドイツの「プロヘッソルフネル」原著に基づいている。

▲『医科全書 解剖篇』東京医学校教師独逸国医

官 繆列児口授、山崎元脩筆記、明治一〇年一月刊。お雇い外国人教師レオポルト・ミュルレル (Leopold Müller) の講義録である。

▲『改訂 医科全書 解剖篇』東京医学校教師独逸国医官 忽布満口授、崎元脩筆記、東京、島村利助、明治一三年二月一二日。ミュルレルと同じくお雇い外国人教師テオドル・ホフマン (Theodor Eduard Hoffmann) の講義録である。

▲『組織学』

▲大江範生「備忘日記録」明治一五年三月。大江億司による医学校の講義メモなど。

東京医学校での翻訳はまだ完璧ではなかったためか、版本の多くのページに削除や訂正が見られる。段落全体が書き直された所もあったので、億司は追加されたページを入れて、大分町の「製本所」村上勘兵衛^{かんべえ}に改めて製本を依頼した(図六)。医学校の教諭たちは、教科書を読み上げながら説明していたようだ。緻密で乱れない億司の講義録も、このような授業形態を反映している。

高浦照明は、『風雪の一世紀 大分県立病院百年史』で教材不足の問題を指摘している。明治十四(一八八一)年三月十二日付「南豊新聞」の投書欄に、古城白夫という学生の抗議文が掲載された(「告県会議員」)。特に機器や書籍の貸し出しがないことに不満が募っていたようである²⁹。海外の

高価な専門書を十分に揃えられなかったことにも、財政基盤の脆弱さが表れている。初年度は順調だった県立病院の収入は、その後減り続け、どうしても必要な医学士三名の人件費の負担は益々重くなった。赤字経営に陥った病院と学校に補助金を出さざるを得ない県議会では激しい議論が続いた³⁰。松方正義大蔵卿の政策が招いた深刻なデフレ(「松方デフレ」)と世界恐慌の影響で地方の財政の悪化が深刻になっていた。明治二十(一八八七)年九月に、地方財政の健全化を図るために公立医学校の費用を地方税から支弁することを禁ずる勅令が出された。

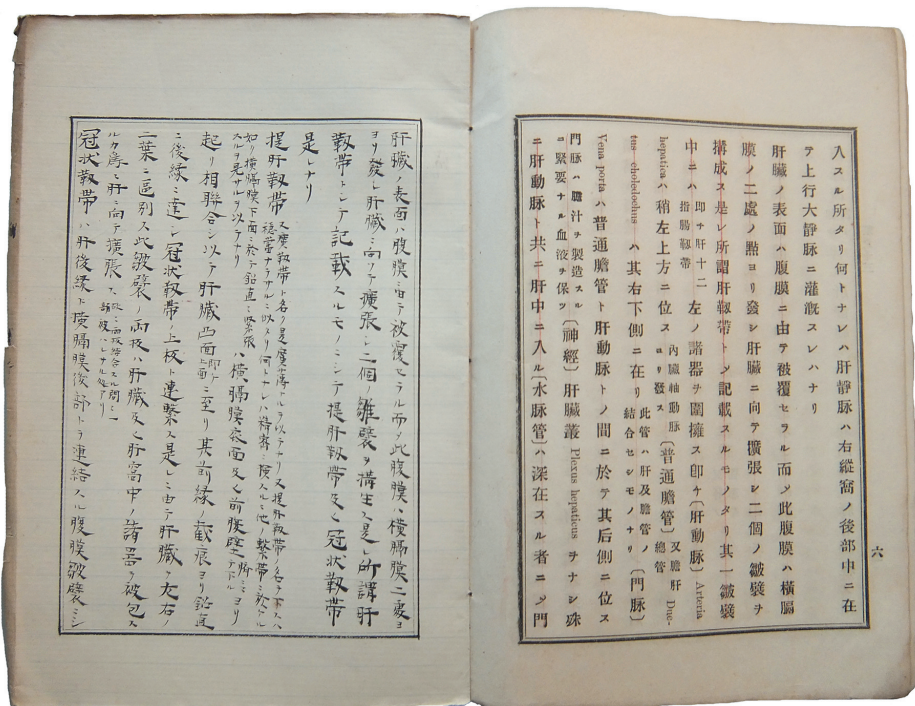
「府縣立醫學校ノ費用ハ明治二十一年度以降地方税

ヲ以テ之ヲ支辨スルコトヲ得ス」³¹

これによって、経済的余裕のある愛知、京都、大阪の医学校は存続できたが、多くの地方医学校と共に大分県立医学校は明治二十一(一八八八)年に閉校し、明治二十三(一八九〇)年には病院も一旦閉鎖されることになった³²。

三、写本「動脈一覽図」

近代医学教育では人体の構造を知るために解剖は欠かせないが、大分県立医学校での現状は厳しかった。献体がまだ根付いていない明治初期の日本で、一般患者から「生前の志願」を得るのは、非常に困難であった³³。鳥潟恒吉校長の報告



図六 『組織学』
(大江医家史料館蔵)。

はその状況を明瞭に伝えている。解剖見学の機会も不足していた。

明治十三年三月～十二月

裁判上関スル局処解

剖 一、 罪人病死

解体 一、 当院病

体局処解剖 なし

明治十四年一月～十二月

裁判上関スル局処解

剖 一、 罪人病死

解体、 当院病

体局処解剖 一³⁴

明治十五年一月～十二月

裁判上関スル局処解

剖 一、 罪人病死

解体、 当院病

体局処解剖 一³⁵

明治十八年一月～十二月

入院患者病体局処解

剖 一、 罪人病死

局処解剖 一³⁶

明治十九年一月～十二月

入院患者病体局処解

剖 一、 在監人病

死局処解剖 一³⁷

解剖可能な死体が慢性的に不足していたため、全国の医学校が模型を利用するようになった。大分県立医学校の第一次

報告は、これらのものを「医学校付属器械表」で列記している。

「医学校付属器械表」

名称	具数	品数
人工紙塑体	一	一
眼球キンストレーキ	一	一
人工耳キンストレーキ	一	一
連骨	一	一
離骨	三	三
解剖器	一	二七
小解剖器	五	四五
打聴診器	十	十
箱	二	二
合計	二五具	九一品 ³⁸

木造の骨格模型は一八世紀末から製造されていたので、上記の「連骨」(全身骨格模型)と「離骨」(分離骨格模型)は国産品であったと思われる。「人工紙塑体」は、一九世紀初頭にフランス人解剖学者オズー (Louis Thomas Jérôme Auzoux, 1797-1880) が紙粘土で作成した組立式実体模型で、約一三〇の部分から構成されている。ポンペがオズーの店からこの模型を取り寄せ、教材として使われるようになってから、オランダ語起源の「キンストレーキ」あるいは「キンストレーキ」(kunstijk、人工的)という名称で知られるよ

うになった。ヨーロッパでの値段は、蟬人形より大幅に安かったが、加賀藩が明治二(一八六九)年に長崎で入手したものは八〇〇両もした³⁹。明治十七(一八八四)年四月二十六日付の「東京医事新誌」に掲載された広告からわかるように、類品の国産品が当時の市場に登場したが、それも決して安くはなかった(図七)。明治十四(一八八二)年の「南豊新聞」に掲載された抗議文の、人体模型を宝物のように扱う学校に対する「生徒ノ拝顔絶テ無シ」という批判は妥当だったが、高価で壊れやすい人体模型を守りたい学校側の憂慮も無理のないことであつた⁴⁰。

解剖書の書名は、明治十八(一八八五)年の活動を総括する第三次報告で示されている。

「ボック解剖図式」(Carl Ernst Bock)

「ハイツマン氏解剖式」(Carl Heitzmann)

「ヒルトリ氏解剖教授書」(未定)

「ホフマン氏解剖書」(Eduard Hoffmann)

「ヘンレイ氏解剖図式」(Friedrich Gustav Jakob Henle)

「ブラウチ氏局処解剖図式」(未定)

上記の「原書」とは別に「訳書」として「解剖組織論」、「解剖動脈論」、「神経一覽」、「動脈一覽図」が列記されている。

「動脈一覽図」は、約一八〇×七五センチメートルの大型の掛図である。大江医家史料館蔵のものを初めて見た時には

廣 告

紙型人形ヲ製造スル日淺ト雖モ之ヲ實地解剖ニ換ユルニ該紙型人形ヲ以テスルニ
 神髓及ヒ内臓五官諸ニ至迄遠隔ナリ且ツ左半身諸筋ハ悉ク取リハツレテ骨格
 自由ナラシムル而已ナラス其精工モ人體解剖ニ異ナルヲナシ依テ今醫術ニ從事
 スニ當テハ一日モ欠ク可カラサルノ良器ナレハ今一層ノ精工ヲ加ヘ精々廉價ヲ以
 テ醫界致候間不相變御愛顧ノ程謹テ企望ス
 但紙型人體解剖體形全體左半身諸筋ハ悉智組ハツレ

惣丈五尺

右之外左上肢右下肢下腿之義ハ全体一個之割合チ以テ差上候也
 醫學器械 東京日本橋區本町三丁目拾六番地

大島專藏

極上等	金三百三十圓
中	金百七十五圓
大	金貳拾圓
小	金拾九圓
小	金拾八圓
小	金拾七圓
小	金拾六圓
小	金拾五圓
小	金拾四圓
小	金拾三圓
小	金拾二圓
小	金拾一圓
小	金拾圓
小	金九圓
小	金八圓
小	金七圓
小	金六圓
小	金五圓
小	金四圓
小	金三圓
小	金二圓
小	金一圓

図七 国産キュンストレーキの広告
 (「東京医事新誌」明治十七年四月二十六日)。

印刷物のように見えたが、後の調査で、億司が精密に模写したものと判明した。興味深いことに、億司と一緒に明治十九(一八八六)年に大分県立医学校を卒業した豊後大野出身の筑波直(すなお)も在学中に同様の模写を作成している⁴¹⁾。担当教員が学生たちに動脈系統を覚えさせるために、写しを作成させたようである(図八)。

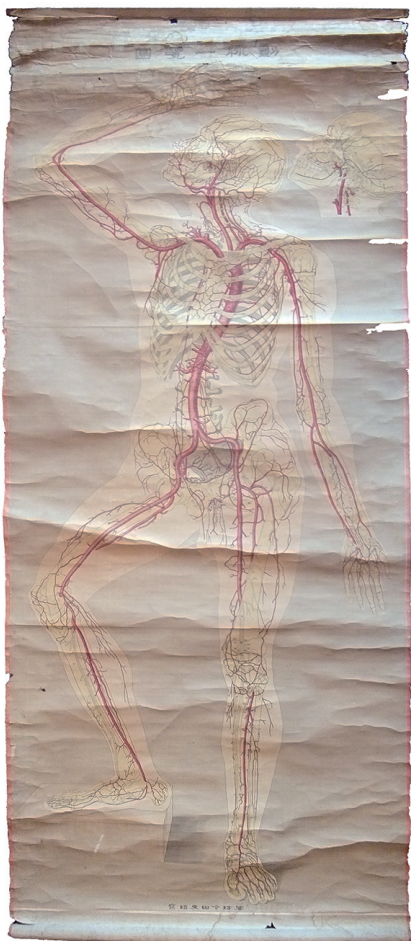
四、銅版刷「動脈一覽図」とその背景

億司らが写した「動脈一覽図」は、日本の解剖学の草分け今田束(つかぬ)(一八五〇～一八八九)が明治九(一八七六)年に刊行した銅版印刷の掛図である(図九)。後世の無関心や酸

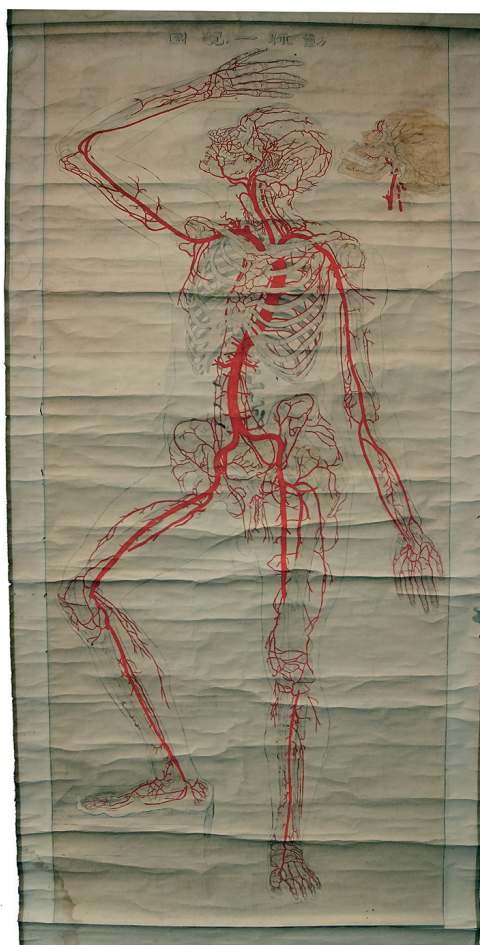
性紙の劣化により、明治期の印刷物の多くは廃棄処分されてしまったため、この「動脈一覽図」もほんのわずかしが残っていない⁴²⁾。

筆者が入手した一軸(一七一×七五センチメートル)の裏面には朱印で「板權免許 模寫翻譯出版人東京第四大區一小區神田淡路町二丁目四番地 今田束」及び「今田束出版動脈一覽圖 定価貳圓」と記されている(図十)。

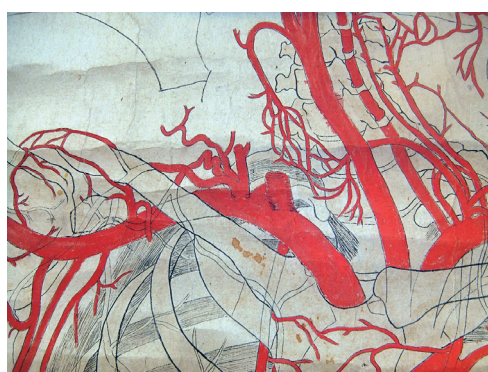
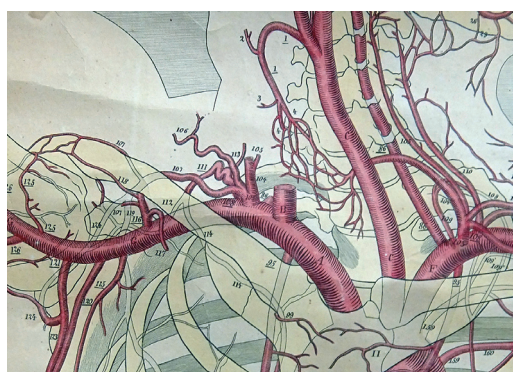
両図版の下部には「周防今田束臨写「謹写?」」とある。身体の各部分には動脈幹を示すローマ数字及び動脈を示すアルファベットや通し番号が付されている。それぞれの名称は『動脈一覽図解』(明治九年四月序)という小冊子に記されている。また、明治九年版と一緒に、『動脈一覽図解附録 心臓図』が刊行された。明治十一(一八七八)年八月に出版された第二版に、今田は名称などを校閲した上で、一連の図画を加えた(図十一)。

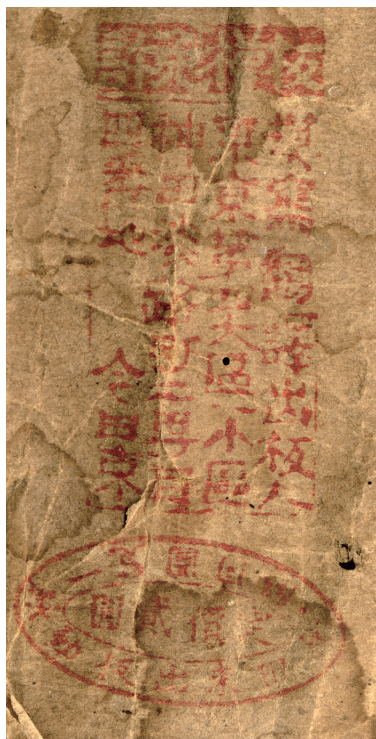


図九 今田束「動脈一覽図」
(筆者蔵)。

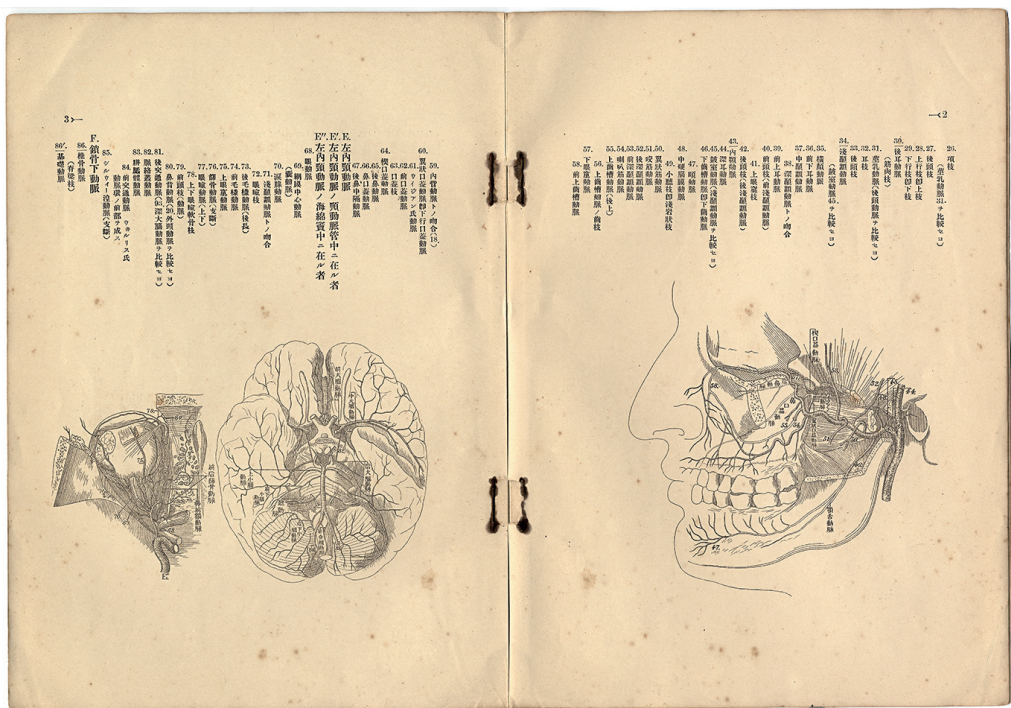


図八 大江億司写「動脈一覽図」
(大江医家史料館蔵)。





図十 今田東「動脈一覽図」裏面の朱印



図十一 今田東『動脈一覽図解』明治十一年八月序（筆者蔵）。

この掛図の制作者今田東⁴³は、慶應義塾で洋学を学んだのち、明治五（一八七二）年、第一大学区医学校に入学し、翌年に来日したドイツ人解剖学者、ヴィルヘルム・デーニッツ（Friedrich Karl Wilhelm Dönitz, 1838-1912）のもとで解剖学を修めた⁴⁵。今田は明治十二（一八七九）年に東京大学医学部の助教授に就任し、のち教授に昇進したが、明治二十二（一八八九）年に死去した⁴⁶。著書のうち、『実用解剖学』は一八八七年から一九一三年まで版を重ね広く利用された。

「動脈一覽図」の底本について、今田は次のように述べている。

「動脈一覽圖ハ獨逸國「ロベルトフロリープ」氏出版ノ原幅ニリ枝幹分枝ノ安排循行浮沉ノ位置確切明瞭最モ日常指摘ニ便ナリ」⁴⁷

ボン大学で医学博士号を取得したロベルト・フロリープ（Robert Friedrich Frobiep, 1804-1861⁴⁸）は、一八三三年から一八四六年までベルリンのシャリテ病院（Charite）で検死解剖者（Prosecutor）を務めながら、芸術アカデミーで美術解剖学を教えていた。画才にも恵まれていたフロリープは美術に生き甲斐を感じており、父親の死亡を機に病院の職を辞し、ワイマールの著名な出版社兼研究所「Landes-Industrie-Comptoir」（ワイマール地方開発社）で科学・医学

の書籍や大型銅版画の出版に携わることになった。フロリープは医学の分野で何か新しい発見をしたわけではないが、彼の出版活動により海外の重要な研究成果がドイツの医学界に伝わり、彼が発行した雑誌「Notizen aus der Natur- und Heilkunde（博物学と医学の備忘録）」及び「Der ärztliche Hausfreund（医学の友）」は、社会全般に大きな影響を与えた。また、シャリテ病院時代には若きルドルフ・ウィルヒョー（Rudolf Ludwig Karl Virchow, 1821-1902）に解剖を指導し、出世の力添えもしている。

今田東が着目した動脈図は一八五〇年にワイマールで印刷されたものである。

Roberti Frobiepi Icon synoptica arteriarum corporis humani in uno sceleto conjunctum descriptarum in tribus tabulis. Wimariae: Landesindustrie-Comptoir, 1850.

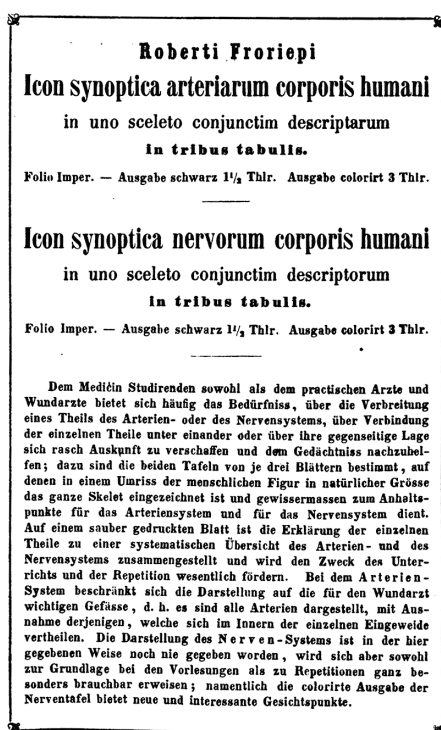
原図は五五×七六センチメートル（Imperial Folio）の紙を用いて三枚（in tribus tabulis）に分けて印刷された。彩色版の価格は三帝国ターラー、単色版はその半分で、中・上流階級出身の医学部生にとっては手頃な値段だった。希望者のために、麻布の掛け軸も製造された。

当時の広告には等身大の神経図も掲載されている（図

Roberti Froriepi Icon synoptica nervorum corporis
humani in uno sceleto conjunctim descriptorum
in tribus tabulis. Wimariae: Landesindustrie-
Comptoir, 1850.

動脈図が「外科医にとって重要な動脈」を示すものであ
る一方、神経図は、それまで「一度もなかった」ものであ
り、講義や復習授業 (Repertorium) で必ず役に立つだろう
と発行者フロリープは述べている。医学生、開業医、外科
医 (Wundarzt) 向けの解説 ([Explicatio iconis synopticae
arteriarum] 及び [Explicatio iconis synopticae nervorum])
がそれぞれ別紙として添付されている。

今田東が、明治十一 (一八七八) 年に刊行した「神経一覽
図」は、大分県立医学校の書籍表で確認できる。図版と一
緒に解説書が挿絵入りの折り本として納品された。明治九
(一八七六) 年刊「動脈一覽図解」は、名称のリストとその
和訳に過ぎないが、明治十一年八月の校訂版は、今田が追加
した図画によって、わかりやすいものになっている。また、
一二丁の『動脈一覽図解附録 心臓図』の存在も忘れてはな
らない。これらの資料の出版は「模寫翻譯出版人」今田教授
から「売捌人」島村屋利助(りすけ)(神田)と丸屋善七(日本橋)に
託された。



図十二 ドイツの出版社による案内広告

おわりに

福澤諭吉は明治三一 (一八九八) 年の『福翁自伝』で緒方
洪庵の「塾風」を振り返り、塾生が原書を書き写したことに
ついて詳述している⁵⁰。資料の不足が写本作成の動機だった
が、書き写すことは、貴重な文書の複写作業を超える基本的
修行形態でもある。仏教と共に日本に根付いた教典の書写に
より、その内容に向き合う時間が生まれ、言葉の美しさや著
者の意図も把握しやすくなる。印刷業が発達し、版本が広く
普及した江戸期においても、多くの場合、自分用の文献を作
成するところから学習が始まった。

書道や絵図についても同じことが言える。洋の東西を問わ
ず、大家の秘術を把握するために、その作品を写すことは

有効な手段と見なされた。観察を重要視する近世ヨーロッパの学者たちも、映像記憶や写生の技能を磨かなければならなかった。医学の発展に伴い、「内景」の視覚化は益々重要になった。十一代將軍家斉の侍医を務めた石坂宗哲が文政八（一八二五）年に刊行した『榮衛中経図』は、パルヘイン（Johan Palryn）の脈管系⁵¹を写したものとされ、氣や氣血の循環経路を示す日本の伝統的な「明堂図」とは一線を画している。石坂のねらいは、経絡系統の再解釈による鍼灸医学の発展だった。⁵²一方西洋医学においては、動脈の一覧図（icon synoptica）を発行したフロリープが案内広告で指摘した通り、動脈に関する正確な知識はとりわけ外科医にとって死活問題である。自分の手で人体解剖を行えなかった大分県立医学校の生徒たちにとって、フロリープの図版を写すことは、有効な代替学習の一つとなったに違いない。長い時間をかけて精密に再現した人体の構造は、しっかりと記憶に残ったことだろう。また、億司が当時の努力の結晶でもある写しを表装し、保存したことに、億司が得た満足感と誇りが感じられる。

【参考文献及び史料】

【参考文献】

- ▲猪飼周平『病院の世紀の理論』、東京、有斐閣、二〇一〇年。
- ▲岩国市史編纂委員会『岩国市史』岩国市、一九七〇～七一年。
- ▲衛藤庵『党人郷記』、大分、大分新聞社出版部、一九三三年。
- ▲大分県総務部総務課編『大分県史』（近代篇二）、大分県、一九八一年。
- ▲川島真人「藤野玄洋と中津」。『日本医事新報』第三九七五号（二〇〇七年）三九～四三頁。
- ▲金沢大学医学部百年史編集委員会編『金沢大学医学部百年史』金沢、金沢大学医学部創立百年記念会、一九七二年。
- ▲厚生省医務局編『医制百年史』、東京、ぎょうせい、一九七六年。
- ▲坂井建雄編『日本医学教育史』、仙台、東北大学出版会、二〇一二年。
- ▲高浦照明著『大分の医療史』、大分、大分合同新聞社、一九七八年。
- ▲高浦照明編著『風雪の一世紀 大分県立病院百年史』、大分、大分県立病院、一九八〇年。
- ▲酒井恒「加賀藩のキンストレーキ」。『日本医史学雑誌』第一六卷第二号（一九七〇年六月）一〇四～一〇五頁。
- ▲島田和幸「明治初期の系統解剖学書」『鹿児島大学歯学部紀要』第一九号、一九九九年、十五～二二頁。
- ▲宗田一、蒲原宏、長谷川洋治、石田純郎編著『医学近代化

と来日外国人」、大阪、世界保健通信社、一九八八年。

- ▲東京大学医学部創立百年記念会・東京大学医学部百年史編集委員会編集『東京大学医学部百年史』東京、東京大学出版会、一九六七年。

- ▲細田富多著「大分県立医学校と大江家」。ミヒエル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀共編『人物と交流Ⅱ』中津市教育委員会、二〇一〇年、四八～六二頁。

- ▲山本艸堂編『下毛郡史』上津村（大分県）、私立三余女学校、大正元（一九一二）年。

- ▲『福翁自伝』慶応義塾編纂『福澤諭吉全集』第七卷、岩波書店、一九五九年、六六～六九頁。

Mieko Macé: La médecine d'Ishizaka Sotetsu (1770-1841) en tant que modele culturel de l'époque Edo. In: Cahiers d'Extrême-Asie, No. 8 (1995), pp. 413-438.

- ▲Meyer, Bernd: Pathologe und Geschäftsmann - Der Arzt Robert Friedrich Froriep (1804-1861). Berlinische Monatschrift (Luisenstadt), Heft 4/2001, pp. 60-65.

【史料】

- ▲今田東（飜訳模写出版人）「動脈一覽図」、東京、明治九年刊。一七一×七五センチメートル。（筆者蔵）

- ▲今田東（飜訳模写出版人）「動脈一覽図解」、東京、明治九年。（国立国会図書館蔵）

- ▲今田東（飜訳模写出版人）『動脈一覽図解附録 心臓図』、

東京、明治九年十一月。（新潟大学藤田文庫収蔵）

- ▲今田東（飜訳模写出版人）動脈一覽図付録 心臓図。

- ▲大江億司写「動脈一覽図」。一八〇×七五センチメートル。（中津市大江医家史料館蔵）

- ▲鳥潟恒吉編輯『大分縣病院兼醫學校第一次報告 自明治十三年至明治十五年』『大分町』、明十六年（国立国会図書館蔵）「第一章 院校設立ノ事第二章 院校処務ノ事・第三章 諸規則・第四章 病院諸表・第五章 医学校諸表・第六章 病院医学校財産表・第七章 病院医学校出納表」

- ▲鳥潟恒吉編輯『大分縣病院兼醫學校第二次報告 自明治十六年至明治十七年』『大分町』、明十八年（国立国会図書館蔵）

- ▲鳥潟恒吉編輯『大分縣病院兼醫學校第三次報告 自明治十八年』『大分町』、明十九年（国立国会図書館蔵）

- ▲鳥潟恒吉編輯『大分縣病院兼醫學校第四次報告』『大分町』、明二十年（国立国会図書館蔵）

- ▲福澤諭吉、小幡篤次郎『学問のすゝめ』初版。（中津市大江医家史料館蔵）

- ▲「保証書」。（中津市大江医家史料館蔵）

- ▲Icon synoptica arteriarum corporis humani in uno sceloto conjunctim descriptorum. Wimariae: Landesindustrie-Comptoir, 1850.

- ▲Icon synoptica nervorum corporis humani in uno sceloto conjunctim descriptorum. Wimariae: Landesindustrie-

Comptoir, 1850.

►Explicatio iconis synopticae arteriarum: a Roberto Froriep in uno sceleto coniunctum descriptorum. Wimariae: Landesindustrie-Comptoir, 1850.

►Explicatio iconis synopticae nervorum: a Robert Froriep in uno sceleto coniunctum descriptorum. Wimariae: Landes-Industrie-Comptoir, 1850.

一二六頁。

9 安政二（一八五六）年十二月に出羽国秋田郡花岡村に生まれる。東京帝大医学部の第二期生。二五歳の若さで大分県立病院の院長及び医学学校の校長になった。明治三十一（一八九八）年に別府に朝見病院を、大正三（一九一四）年には鳥潟保養院を建てた。同年十月十九日に死去。享年六〇。

- 1 山本艸堂編『下毛郡史』、六九三頁。
- 2 入学年月は、山本艸堂編『下毛郡史』、六九三頁より。
- 3 医学学校校則及び学則については、高浦照明『風雪の一世紀 大分県立病院百年史』三九〇～四〇五頁参照。
- 4 岡本左馬太は明治十八年に豊後大野市で病院（現・特定医療法人帰巖会）を開設した。

10 明治二十一年四月より同二十五年十月まで、金沢の第四高等中学校医学部の六代目内科教諭及び精神科教諭を務めた（金沢大学医学部百年史、一三六、六二四頁）。一九〇一年、黒柳精一郎は鈴木矩治、磯彝、浅田決と共に解剖図六〇〇点からなるHeizmannのDie descriptive und topographische Anatomie des Menschen (Wien, 1870)を翻訳した：黒柳精一郎他訳『海都満大解剖図』東京、金原医籍店、明治三十四年。

- 5 「保証書」、大江医家史料館蔵、整理番号一三〇。
- 6 宇都宮徠は、長崎でボードインに師事したのち、明治六年に大分県用医となり、同九年県下初の私立病院を大分町に開設した（『講談社日本人名大辞典』（二〇〇一年）より）。
- 7 鳥潟恒吉『大分県病院兼医学学校第一次報告』、四四丁。
- 8 高浦照明『風雪の一世紀 大分県立病院百年史』

11 鳥潟恒吉『大分県病院兼医学学校第一次報告』、四一丁。
12 「備忘日記録」。大江医家史料館蔵（請求番号七〇）。
13 細田富多「大分県立医学学校と大江家」『人物と交流Ⅱ』、四八～六二頁。
14 鳥潟恒吉『大分県病院兼医学学校第二次報告』、三丁。
15 山本艸堂編『下毛郡史』、六九三頁。
16 山本艸堂編『下毛郡史』、六九四頁。
17 山本艸堂編『下毛郡史』、六九四頁。
18 山本艸堂編『下毛郡史』、六九四頁。

- 19 衛藤庵『党人郷記』、三六一―三六二頁。
- 20 鳥潟恒吉『大分県病院兼医学校第一次報告』、四一丁。
- 21 玄洋の生涯と功績については、川寫真人「藤野玄洋と中津」参照。
- 22 下瀬の政治思想には興味深いものがある。下瀬文蔵（絢堂）著『渡世之目的』西国東郡玉津村（大分県）、明治二十一年刊。
- 23 鳥潟恒吉『大分県病院兼医学校第一次報告』、第四章（病院諸表）。『大分県病院兼医学校第二次報告』、第八章（病院諸表）。『大分県病院兼医学校第三次報告』、第五章（病院諸表）。『大分県病院兼医学校第四次報告』、第五章（病院諸表）。
- 24 鳥潟恒吉『大分県病院兼医学校第一次報告』、二六―二七丁。
- 25 「五期以上ノ生徒ニハ入院患者中ニテ受持チ定メ病症日誌ヲ作ラシム」。鳥潟恒吉『大分県病院兼医学校第一次報告』、二七丁。
- 26 鳥潟恒吉『大分県病院兼医学校第一次報告』、二七―二八丁。
- 27 鳥潟恒吉『大分県病院兼医学校第二次報告』、六―七丁。
- 28 鳥潟恒吉『大分県病院兼医学校第三次報告』、九―一六丁。
- 29 高浦照明『風雪の一世紀 大分県立病院百年史』、一二二―一二三頁。
- 30 高浦照明『風雪の一世紀 大分県立病院百年史』、一四六―一五三頁。
- 31 勅令第四八号、明治二十年九月三十日。
- 32 坂井建雄「明治初期の公立医学校」。坂井建雄『日本医学教育史』、六一―一三頁。高浦照明『風雪の一世紀 大分県立病院百年史』、一五五―一六一頁。
- 33 高浦照明『大分の医療史』、四六六―四八一頁。
- 34 この病理解剖に関する報告は『碩田医報』（第六号、明治十四年八月）に掲載された。高浦照明『風雪の一世紀 大分県立病院百年史』、四六〇頁参照。
- 35 鳥潟恒吉『大分県病院兼医学校第一次報告』、三九丁。
- 36 鳥潟恒吉『大分県病院兼医学校第三次報告』、四三丁。
- 37 鳥潟恒吉『大分県病院兼医学校第四次報告』、四四丁。
- 38 鳥潟恒吉『大分県病院兼医学校第一次報告』、四六丁。
- 39 酒井恒「加賀藩のキンストレーキ」。
- 40 高浦照明『風雪の一世紀 大分県立病院百年史』、一二二―一二三頁。
- 41 筑波直は、郡山村（現大野町）で代々医師を輩出した古い医家の四代目である。上記の書簡（六月十七日付）から億司と親交があったことがわかる。筑波家の動脈一覧図などの医学史料については、クリニックのウェブサイトを参照（<http://chikuba-clinic.jp/history02.html>）。大分県立医学校の進級証書及び卒業証書は、高浦照明著『大分の医療史』四四八、四四九頁に掲載されている。
- 42 「動脈一覧図」京都大学所蔵近代教育掛図（登録六八〇門／五六）。

- 43 岩国市史編纂委員会『岩国市史』、二二六頁。
- 44 慶應義塾入社帳」第一卷三四五項。
- 45 デーニッツについては、宗田一、蒲原宏、長谷川洋治、石田純郎『医学近代化と来日外国人』九六、九七頁（小関恒雄）参照。
- 46 『東京大学医学部百年史』、一〇〇、二四五頁。
- 47 今田束「動脈一覽図解」明治九年、序文。
- 48 B. Meyer: Pathologie und Geschäftsman - Der Arzt Robert Friedrich Froiep (1804-1861) 参照。
- 49 Philipp Liadet: Memoranda der medicinischen Botanik (1851) に掲載。
- 50 『福翁自伝』第七卷、六六～六九頁。
- 51 Johann Palfyn: Heelkonstige Ontleeding van's Menschen Lichaa. Leyden, J. & H. v. d. Deyster, 1733.
- 52 Macé (1995), 西川輝昭「栄衛中経図」の展示記録」。

attitude and thinking were adopted by his descendants, who continued to serve as physicians to the Nakatsu clan until the end of the Tokugawa era.

Wolfgang MICHEL

On Ōe Okuji's *Dōmyaku Ichiranzu* (“Synoptic Chart of Arteries”) and its Background

In 1869, the new Meiji government decided to suppress traditional Sino-Japanese medicine and introduce modern Western medical education based on the German model. While Tokyo University hired European, preferably German, professors to train their elite students, less gifted aspirants to the medical profession and practicing physicians all over the country had to attend one of the regional medical schools (*igakkō*) to obtain their obligatory medical licenses. Most of these schools were established by prefectural and municipal assemblies that felt an obligation to provide sufficient services to the local community. In 1882, the Ministry of Education divided these institutions into two groups. Whereas those in the first group (*kō*) were allowed to issue licenses to students who passed their final examinations, the vast majority of schools belonging to the second group (*otsu*) were required to organize additional examinations. Understandably, many schools in the second category sought to upgrade to the first category, but the required extension of the curriculum to four years and the requirement that at least three teachers with a doctoral degree (*igakushi*) be employed, in addition to other specifications, placed a heavy financial burden on students and local budgets.

Ōe Okuji (1864–1919), whose ancestors had served as physicians in the domain of Nakatsu for generations, became the first in his family to receive a medical education under this new system by entering the Public Medical School of Ōita Prefecture (*Ōita-ken kōritsu igakkō*).

This school was founded in 1880, and was plagued by the difficulties experienced by all early Meiji-era institutions. Torigata Tsunekichi, a young graduate from Tokyo University, managed the establishment, taking care of dozens of students, most of whom were older than him. This school in the small

city of Ōita opened its doors by offering a three-year program (soon expanded to four years) with courses in physics, chemistry, surgery, internal medicine, pharmaceuticals, ophthalmology, gynecology, anatomy, and physiology, and a one-year internship in the adjoining hospital. Four reports compiled by Tomigata provide detailed information on the curriculum, teaching staff, buildings, regulations, equipment, and subjects and examinations, including statistics related to the small affiliated hospital. Although the school ran smoothly for a while, it soon ran out of funds. In 1889, after the government in Tokyo had stopped providing regional subsidies to public medical schools, the Ōita Medical School closed its doors, as did many other regional schools. The hospital was reopened later that year, and continued to operate as a prefectural hospital.

The Ōe Medical Archive holds a few items from the years Ōe Okuji spent in Ōita: a diary that contains occasional notes made in 1885, lecture notes, and several books, which primarily contain printed lectures given by foreign professors at Tokyo University, including Benjamin Karl Leopold Muller, Theodor Eduard Hoffmann, and Erwin Baelz. Because medical literature was extremely expensive and difficult to obtain, students used to write down lectures word by word.

Anatomical instruction was also based on texts. Because Japanese society abhorred the idea of postmortal dissection, there was hardly any opportunity for students to see inside the human body, let alone conduct dissections themselves. In Ōita, although a papier-maché anatomical model (probably imported at great expense from Jérôme L. Auzoux) was occasionally shown to students, it was usually kept locked away. Books held by the library could not be taken out, but had to be read there.

In 1876, Imada Tsukanu (1850–1889), an anatomy professor at Tokyo University, published at his own expense a life-sized color chart of the human artery system using the “Icon synoptica arteriarum corporis humani” printed by Robert Friedrich Froriep (1804–1861) at the famous Landes-Industrie-Comptoir publishing firm in Weimar (Germany). Although Imada’s version, *Dōmyaku Ichiranzu*, was widely circulated among medical institutions throughout Japan, only a few copies have survived to the present day. The chart used in Ōita vanished long ago. However, Ōe Okuji, a young man deeply rooted in tradition,

did what monks and scholars in Japan had been doing since the beginning of religious and secular scholarship: he made a meticulous copy of Imada's copperplate engraving. Considering his busy schedule of classes, this project must have taken weeks, after which it must have been impossible for him not to know the human arterial system. After graduating in 1886, he mounted these sheets and kept the scroll in his clinic. A cursory look at this copy was enough to refresh his memory of the hardships suffered in those early years of modern medical education.

Wolfgang MICHEL

On the Book *Shindan zusetsu* (“Illustrated Physical Diagnosis”) and Ōe Okuji’s Manuscript Copy

Surviving source materials relating to education in 19th-century regional medical schools (*igakkō*) are rare, partly because a lack of interest among following generations, and partly because of the short life span of many of those institutions. Ōe Okuji's (1864–1919) ancestors served as physicians in the domain of Nakatsu for more than 150 years. His father, Untaku (1822–1899), a widely respected man with many disciples, successfully switched from Sino-Japanese to Western-style medicine during those dramatic decades of the late Tokugawa era. Having grown up in the early years of the Meiji Restoration, Okuji was the first in his family to receive a Western-style education, at the Ōita Prefectural Medical School, from which he graduated in 1886. Some of his books and lecture notes are held by the Ōe Medical Archive (Nakatsu), to which one of the items is unique. This is a copy of a manuscript entitled “Illustrated Physical Diagnosis–Illustrations” (*Shindan zusetsu-zufu*). The accompanying booklet “Illustrated Physical Diagnosis” (*Shindan zusetsu*) was published in 1879 by Yoshimatsu Bunji. While the first volume of Yoshimatsu's print can be found in two libraries, the second volume containing the illustrations has vanished.

Had Yoshimatsu's work simply been a translation of the foreign book the “Manual of Physical Diagnosis” published in 1878 in New York by the pathologist Francis Delafield (as is suggested by Yoshimatsu's title), this disappearance would not be a problem. However, being well aware of Delafield's